

クローン人間を考える

クローン羊ドリーと2世のポニー（1998年4月）



映画や空想小説の世界だったクローン人間が、現実の問題になった。新興宗教団体が設立した「クローンエイド」社が二十七日、世界初のクローン人間を誕生させたと発表した。続いて、イタリア人医師セベリノ・アンティノリ氏も、二〇〇三年一月に生まれると公表している。その真偽については疑問視する声もあるが、世界的に大きな論議を呼んでいる。これを機に、現代社会に突きつけられたクローン人間をめぐる問題を科学、倫理、文化の各方面から考察した。

（文化報道部 二松啓紀）

来日してクローン人間計画を話す「ラエリアン」の科学責任者、ブリジット・ボワセリエ氏（右） 11月9日、東京都のホテル



クローン 同じ遺伝形質を持つ点では一卵性双生児と共通しているが、クローンは人為的な操作が加わる。家畜では受精卵の細胞を使う受精卵クローンもあるが、社会的な議論を起しているのは体細胞クローン。ただし、クローン人間であっても育成環境に影響を受けるため、同じ人間になる訳ではない。

則にしながら、「子宮に恵まれない両親の願い」を根拠に、治療対象を拡大してきた。現在、日本では新生児の百人に一人が体外受精などの技術で生まれている。

体外受精の延長線上

問題として、検査察並に「だ」と警鐘を鳴らす。厳しい国際規制が早急に必要だ」と指摘する。しかも現在は、誰でもインターネットから最新研究成果を取り出せる

に、「社会秩序の混乱をきたす」との批判は影をひそめてしまった。小原助教は、西洋の伝統的な生命観が必ずしもクローン人間誕生の歯止めにつながらないという。「科学技術でコントロールできるにもかかわらず、ヒトの誕生をいつでも偶然性に委ねるのは不道徳だとする考えがある。神から与えられた創造性を発揮してこそ道徳的だとする。少数派だが、根強い考え方になっている。感情的に反対するだけでは、阻止できない」と説明する。

次世代への権利侵害

一方、位田隆一・京都大学学術研究科教授は「生まれてくる人間はまぎれもなく人間であって、人権がある。しかし、最初からクローン人間として生まれることを望む人はいない。そうならば、新たに「次世代への権利侵害」について論じる必要がある」と指摘する。

一九七八年に公開された映画「ブラジルから来た少年」は、戦後ナチス軍の医師がヒトラーのクローンをつくり、第三帝国の再来を期すというストーリーが展開する。話が独裁者ヒトラーのクローンだから恐ろしいが、これがエジソンやアインシュタインのような唯一無二の存在という人間が、これがエジソンやアインシュタインのような唯一無二の存在という人間の尊厳を混乱させる恐れは十分ある。

自然界の法則を覆す行為

厳しい国際規制が必要

状況にあり、科学者たちが積み重ねた専門知識を別の人間が悪用する可能性も十分にある。今井教授は「まったく意図しないにせよ、良識ある科学者が、クローン人間づくりを担う結果も招きかねない。科学の本来の目的は何か、あとにも応用されてきた。『自然に近い状態』を原

成功率、安全性に疑問

しかし、これはあくまで動物実験の話であり、ヒトへの応用は、ほとんどの科学者が成功率と安全性への疑問から反対し

る。クローン動物の研究に携わる今井裕・京都大農学研究科教授は「クローン人間誕生は」自然の法則を真向から否定する行為だ。科学だけのためて問い直すべき

生命科学の倫理問題に「自分のクローンをつくり、弱った臓器を交換し、不老長寿も夢ではない。こんな臓器移植を狙いといたクローン生命科学の倫理問題に「だ」と警鐘を鳴らす。厳しい国際規制が早急に必要だ」と指摘する。しかも現在は、誰でもインターネットから最新研究成果を取り出せる



英国のロスリン研究所 培養によって、いろいろが一九九六年に世界初の体細胞クローン羊ドリーを誕生させた。カエルでは成功していたが、ほ乳動物では不可能と考えられてきたため、世界的に大きな話題となった。通常の生殖は、精子と卵子の両方が必要だが、クローンは精子を必要としない。代わりに特殊な

クローン社会の到来に危機感を抱く佐藤卓巳・国際日本文化研究センター助教は「有用な人間をつくる発想は、無用な人間を排除する考えに通じる」と警告したうえで、「クローン人間はこうした優性思想上の話に止まらない」ともいう。

クローン技術は、確かに医学上、多大な恩恵をもたらす。その一方で、民主主義の観点からは、人間が等しく先端医療を受ける権利を持つと理解される。佐藤助教は「結局、民主主義の下でクローン技術に反対する論拠はなくならず、未来は間違いないクローン社会に向かって突き進んでいく」と言い切る。

クローン技術の危険性は、近代芸術史の中にも見ることができ。つまり、複製技術の登場によって、それまで特権階級が独占していた芸術が「大衆化」された。ところがコピーが氾らんし、だれでも有名な絵画を鑑賞したり演奏会を楽しめるようになった。その結果、オリジナルが輝きを失ってしまった（佐藤助教）。

芸術作品は、紛れもなくオリジナルに価値がある。人間はどうか。オリジナルとクローンの価値を比べること自体ナンセンスであるが、「クローン赤ちゃん誕生」が、唯一無二の存在という人間の尊厳を混乱させる恐れは十分ある。